

四く九世紀のカシユミール仏教事情

蓮 沼 龍 子

一、はじめに

カシユミールは、インド北部山岳地帯の溪谷地であり、古代に仏教が栄えたばかりでなく、仏典結集の地としても名高い。しかし現在ではイスラム教徒が住民の七〇%を占め、仏教徒は一・四%にすぎない。この地における仏教の伝播から衰退までを、カシユミールの歴史書、カルハナ作『ラージャタランギーニ』（以下『R. T.』と省略⁽¹⁾）を中心に考察してみると、次のような段階を経たことがわかる。

第一段階 仏教伝播とその繁栄(紀元前三世紀〜紀元後三世紀)

第二段階 仏教の浸透と拡散(四く九世紀)

第三段階 仏教の衰退(十く十四世紀)

このうち第一段階については、すでに発表をおこなったが⁽²⁾、ここでその概略を述べておきたい。

仏教は、マウリヤ王朝時代にカシユミールへ伝播したと考えられる。『R. T.』には記されていないが、仏典などから考えると、この地の伝道で大きな役割を果たしたのは、マッジャンティカという仏僧らしい。カシユミールにはもともとナーガ(Naga)

蛇) 神信仰があり、仏教伝播後も引続き信仰されてきた。しかし、宗教に寛容なクシャーナ王朝の下で信徒を増やしていった仏教は、住民にナーガの儀式をやめさせ、この土着信仰に圧迫を加えた。ナーガ信仰は勢力の回復をはかり、ゴナンデイヤ王朝の創始者ゴナンダ三世の時代に儀式を復活させた。このように、両宗教は激しく対立し、為政者の支持を得ようとしのぎをけずりながらも、カシユミールの地で共存していた。

以上が前稿の要約であるが、本稿では、仏教をとりまく状況がその後どのように変化したのかを検討していきたい。

一、クシャーナ王朝以降、カールコータ王朝 成立前までの仏教

カシユミール建国から十二世紀までの王統史を綴った『R. T.』は、宮廷詩人カルハナによって書かれた美文体詩の形式をとる歴史書であるが、『R. T.』全八章のうちI—VI章、つまり十世紀までは記述が簡潔すぎ、その上伝説的記事が多いといわれている⁽³⁾。この期間の王朝のうち、クシャーナ第二王朝(紀元後二く三世紀頃)とカールコータ王朝(六二二年頃〜八五五年頃)は、中国史

第一表

GONANDĪYA 王朝

	在位期間35年
Gonanda III	
Vibhiṣaṇa I	53
Indrajit	35
Rāvāṇa	30
Vibhiṣaṇa II	35
Nara I (Kīṃnara)	40
Siddha	60
Utpalākṣa	30
Hirapṛyākṣa	37
Hirapṛyakula	60
Vasukula	60
Mihirakula	63
Baka	63
Kṣītinanda	30
Vasunanda	52
Nara II	60
Akṣa	60
Gopāditya	60
Gokarna	57
Khiṅkhila-Narendrāditya	36
Yudhiṣṭhira	34
<hr/>	
Pratāpāditya I	32
Jalaukas	32
Tuṅjina I	36
Vijaya	8
Jayendra	37
Samḍhimati-Āryarāja	47

RESTORED GONANDĪYA 王朝

Meghavāhana	34
Śreṣṭhasena-Pravarasena I	30
Hiraṇya, with Toramāṇa	30
Mātṛgupta	4
Pravarasena II	60
Yudhiṣṭhira II	39
Lakhkaṇa-Narendrāditya	13
Raṇāditya	300
Vidramāditya	42
Balāditya	36

KĀRKOTA 王朝へ

料などからほぼ正確な年代が決定されるが、両王朝間の約四〇〇年間に興った諸王朝についての記事は信憑性が薄いと考えられる。一二七以降、中国は葱嶺以西と交渉を絶つたため、四七世紀のカシュミール地方の事情を記した史料は数える程しかないが、『R. T.』を中心にこの時期の政治情勢及び仏教の動態を総体的にみていこうと思う。

(a) 政治的背景

『R. T.』によると、クシャーナ第二王朝の三人の王（フシユカ、ジュシユカ、カニシユカ）の次にアビマニユ一世が即位したという。この王はクシャーナ王家の者ではなく、王朝のあとをうけてカシュミールを支配した一地方の王であるらしい。その後、ゴーンダIII世によってゴーンデイヤ王朝が開かれ、一〇〇

二年間に二〇人の王が交替する。この王朝は一時跡絶え、王家以外の者が一九二年間政権を担当する。しかしゴーンデイヤ王家が再びそれを奪取し、後ゴーンデイヤ王朝が成立する。以上の王位継承と各王の統治期間は第一表に示すとおりである。これを見てもわかるように、この伝承には種々の疑問点がある。すなわち、(1)クシャーナ第二王朝から一七八三年経過してカールコータ王朝が成立する点、(2)ゴーンデイヤ王朝のヴィビーンヤナI世、II世、インドラジット、ラーヴアナは『R. T.』の中で一〇二句でしか述べられていないことから、王の名は明らかに叙事詩からとられて王統譜にいれられたと思われる点、(3)また、後ゴーンデイヤ王朝のラナーデITYAが三〇〇年間統治したと書かれている点などである。したがって、王についての年代

は疑わしく、また実在の人物かどうか疑問視される王も多い。M. A. スタインはゴーンナンディーヤ王朝が実在したことは証明できるとい(6)うが、この王朝の王統譜はもつと整理されねばならないだろう。いずれにせよ、この王朝について述べた史料が『R. T.』以外にはほとんどないことから、正確な王位継承や年代を知ることが困難である。一方、後ゴーンナンディーヤ王朝については、H. ゲーツが第二表のように王とその統治期間を設定している(6)。

ca. 345—379年	
379—409	
409—469	
469—508	
508—586	
586—622	

第二表

1. Meghavāhana
2. Pravarasena I
3. pravarasena II
4. Yudhiṣṭhira II
5. Raṇāditya
6. Bālāditya

カシュミールでは、クシャーナ第二王朝のあと、ゴーンナンディーヤ王朝が建設され、中断期をはさんで、四世紀中頃、後ゴーンナンディーヤ王朝が建設されたという大まかな流れが想定できるように思う。そして、この前後の王朝が七世紀にカールコータ王朝にとつて代わられたのである。

この王朝の始祖メーガヴァーハナは、『R. T.』によれば、ゴーンナンディーヤ王朝最後の王、ユディシュティラの曾孫であり、カシュミールの大臣らの招聘を受けて亡命先のガンダラから帰国し、王位についたということから、ゴーンナンディーヤ王朝と後ゴーンナンディーヤ王朝の間に王朝の一时的断絶と王位をめぐる抗争があったと考えられる。

正確な年代はわからないけれども、

(b) 仏教の動態

クシャーナ第二王朝以降、カールコータ王朝成立までの仏教事情で注目されるのは、ゴーンナンディーヤ王朝期における破仏と後ゴーンナンディーヤ王朝下における仏教寺院の建立である。

まず破仏については、カルハナは、ゴーンナンディーヤ王朝のナラI世の項で次のように記している。

キンナラグラマ (Kinnaṛaḡama) にある仏教精舎にひとり住んでいた仏僧は、その魔力で〔王の〕妻を誘惑した。
I・一九九

王は激怒して、幾千もの精舎を燃やし、「精舎が所有するそれぞ(10)れの」村をマディヤマタ (Madhyamatha) に住むバラモンに下賜した I・二〇〇

ナラI世はキンナラという別名を持っていたので、仏僧の住んでいたキンナラグラマは、王の名を冠した村である。この村の所在は、マディヤマタの所在と共に明らかではない。『R. T.』の中では、精舎を破壊した最初の人物はナラI世であり、その原因は宗教的問題ではなく、仏僧による奸計とされている。これと類似した話は『仏祖統紀』、『景德伝燈録』、『伝法正宗記』、『釋氏稽古略』(14)の師子尊者伝に見られる。四史料のうち、前三史料は宋代に、最後のものは明代に書かれた。いずれも事件を麗質(カシュミール)で起こったこととする点では一致しているが、所伝間に微妙な違いがある。まず『仏祖統紀』は事件の年を甘露四年(西紀二五九年)とし、仏僧に化けた外道が王妃を誘惑したことが原

因で、王は仏寺を破壊し、師子尊者も殺したが、その結果王自身死に至ったと記している。『景德伝燈録』、『伝法正宗記』、『釋氏稽古略』は、摩目多と都落遮の外道の兄弟が反乱を起こそうとして失敗し、仏僧に罪をさせたことが原因で、以下は『仏祖統紀』と同じである。しかし、『景德伝燈録』は事件の年を魏齊王二十年己卯歲(二五九年)、後二者は魏齊王芳之世(二四〇〜二五三年)としている。⁽¹⁵⁾これらの史料に出てくる王と『R. T.』のナライ世とを軽々しく結びつけることはできないが、カシュミールを含めた北インド方面で、クシャーナ第二王朝崩壊後、支えを失った仏教が寺院破壊などの迫害を受けたことは推測できる。『R. T.』にはナライ世以降ゴーンディヤ王朝の諸王の記事に、仏教に関するものは書かれていない。

後ゴーンディヤ王朝の始祖メーガヴァーハナの治世になって、再び仏教興隆を思わせる記事が見られる。メーガヴァーハナは、先に述べたように、ゴーンディヤ王朝最後の王ユディシュティラの曾孫であり、カシュミールにゴーンディヤ王朝を再建した。カルハナはメーガヴァーハナ王を次のように称えている。

この高潔な者は、高尚な行為によって、衆生に慈悲を注ぐ菩薩たちの行為を凌いだ。 Ⅲ・４

この王は、ジナ(ニブダ)がそうであったように殺生を憎んだので、彼の王国においては、犠牲祭にはグリタ(Grita: 酥油)で作った動物の像が、精霊への供物には練粉で作った動物の像が用いられた。Ⅲ・七

彼のもつ征服欲は、人々に恐れを与えないための配慮をみごとにそなえた力であり、ジナを妬むものであった。 Ⅲ・二

八

カルハナのメーガヴァーハナに対する讃辞には、王の行為の中に仏教的傾向が見られたことを示している。それは、彼が妃たちに精舎建立を認めたことからわかる。

彼の数人の妃たちは仏教を信仰していたらしく、競うようにして精舎を建立した。以下『R. T.』の中から詩句をあげてみよう。

外国の比丘たちの受用のために、王妃アムリタブラバー(Amitrabhava)はアムリタブラヴァナ(Amitrabhava)という精舎を高く聳えるように建てさせた。 Ⅲ・九

彼女の父の師はローホ(Loh)という名の国から来た人であり、その「地の」言葉でストウンパー(stumpā || チベット語の「師」)と呼ばれていたが、彼によりローストーンパー(Lostopa)仏塔が造られた。 Ⅲ・一〇

王の他の妃と懸命に競っていたユーカーデーヴィー(Yukadevi)という王妃は、ナダヴァナ(Nadavana)にすばらしい精舎を造った。 Ⅲ・一一

彼女はその精舎の半分に、戒律に従う比丘を置き、残りの半分に、家長としての地位にいて妻・子ども・家畜・財産を所有するため非難される比丘を置いた。 Ⅲ・一二

その時、インドラデーヴィー(Indradevi)という名の別の王妃は、中庭付きの建物と仏塔のあるインドラデーヴィーバウ

アナ精舎を建てた。 Ⅲ・一三

カーダナー (Khadana) やサンマー (Samna) をはじめとする他の王妃たちによって、それぞれの名を冠した多くの名高い精舎が造られた。 Ⅲ・一四

この他にビンナー (Binnā) という妃も仏教精舎を造っていることが『R. T.』に書かれている。これらの精舎のうち、アムリタバヴァナは七五九～七六三年にカシュミールに滞在した求法僧悟空によって「阿彌陀婆挽寺」と記されている。⁽¹⁹⁾

以上のように、後ゴーンディヤ王朝の新国家建設期にあたるメーガヴァーハナの治世には、仏教活動も盛んであったらしい。特に王妃たちによる精舎建立競争は、宮廷内での仏教の流行を思わせ、これが民衆に仏教を浸透させる上で大きな役割を果たしたと考えられる。

メーガヴァーハナ以後、ブラヴァラセーナ二世、ユディシュティラ二世、ラナーディティヤなどの治世に、仏教寺院の建立があったようである。⁽²⁰⁾ これに関し、『R. T.』の中に次のように書かれている。

その王 (ブラヴァラセーナ二世) の母方の伯父であるジャエーンドラ (Jayendra) は聖ジャエーンドラ精舎と巨大なブッダ [像] を造った。 Ⅲ・三五五

彼 (ユディシュティラ二世) の大臣たち、つまりサルヴァラトナ (Sarvaratna)、ジャヤ (Jaya)、スカンダグプタ (Sanda-gupta) という名の者たちは、精舎・祠堂などの建立や、その

他の「敬虔な」行為によって名声を得た。 Ⅲ・三八〇

ジャエーンドラの息子、ヴァジュレーンドラ (Vajendra) もまた、彼 (ユディシュティラ二世) の大臣であり、祠堂などを建てて、バヴァッチェーダという村を高名にした。 Ⅲ・三八一

メーガヴァーハナの王妃、ビンナーによって建てられた精舎に、彼女 (ラナーディティヤの王妃) はみごとな仏像を置いた。 Ⅲ・四六四

上記の寺院のうち、ジャエーンドラ精舎は七世紀に玄奘が止宿した「闍耶因陀羅寺」のことである。⁽²¹⁾ またジャヤの建てた精舎は悟空の記した「惹惹寺」と考えられている。⁽²²⁾

なお、ラナーディティヤの治世にカシュミールへ侵入したフン族のミヒラクラは、仏教関係の文献に、破仏を行なった王として描かれているが、⁽²³⁾ 『R. T.』によれば、邪悪な心をもつ残虐な暴君ではあるものの、⁽²⁴⁾ 仏教を迫害したという記述はない。ミヒラクラはシヴァ神の祠堂を建て、ガンダーラのバラモンに社寺領地を寄進したと『R. T.』の中で書かれ、⁽²⁵⁾ また碑文からも彼がシヴァ神の信奉者であったことが窺える。したがって、彼の残虐性とインド侵入後にシヴァ信仰をもったことがからみあって、彼の破仏が誇張されたものと思われる。⁽²⁷⁾ しかし、フン族の侵入により、北インド一帯は荒廃し、仏教の本拠地はカシュミールから中インドに移行した。この結果、カシュミールの仏僧の一部は新しい布教地を求めて中国方面へ向かい、訳経僧として活躍することになった。

(28) たのである。

以上みてきたように、カシュミールでは後ゴナンディヤ王朝期に仏教の興隆が見られ、王族や大臣や民衆の厚い仏教信仰を背景に、多数の精舎や仏塔が建立され、仏像が造られた。しかし、フン族の侵入後に仏教は衰退に向かい、カシュミールは仏教の中心地としての立場を失ってしまったのである。

三、カールコータ王朝下の仏教

カールコータ王朝は、六二二年頃成立したカシュミール土着の王朝で、ドゥルラバヴァルダナ・プラジュニヤディティヤ(Dur-labharidhana-Pradyitya)を始祖とする。カールコータの名は、ナーガ神族の一王であるカールコータ龍王の名に由来しており、おそらく王朝建設の氏族が、この龍王を守護神としていたために、後世この王朝の名として採用されたのであろう。『R・T』はカールコータ王朝成立の逸話を載せているので、その要約をここに紹介してみたい。(31)

後ゴナンディヤ王朝のパーラーディティヤ王には、アナンガレーカー(Anangalekha)という名の非常に美しい王女がいた。ある時、占星術師がこの王女を見て、王女の婿になる者は大地を支配するが、後ゴナンディヤ王朝は、パーラーディティヤ王を以って絶えるであろうと予言した。王はこれ聞き、王朝の断絶を防ぐためにアナンガレーカーと王族の者との結婚を禁止し、王族と何の関係もない、馬の飼育

係であったドゥルラバヴァルダナを王女と結婚させた。しかし、彼は、実はナーガ・カールコータ王の息子であり、占星術師の予言は的中してしまった。

こうしてパーラーディティヤの女婿となったドゥルラバヴァルダナは、しだいに政治的手腕を発揮し、王や宮廷の信用を得て、王の死後、カールコータ王朝を建設した。

『R・T』によると、この王はヴィシュヌ神の寺院を、王妃は仏教精舎を建立したという。その他には、寺院建立の詩句は書かれていないので、当時、宗教活動は概して活発ではなかったのかもしれない。

カールコータ王朝時代に仏教が再び活況を呈したと思われるのは、七二三年即位の五代国王ムクタビーダ・ラリターディティヤ(Muktapida-Lalititya)の治世である。この王の時代に、カールコータ王朝は領土を拡大し、ガンジス河中流域のカナウジ(Kanau)を遠征し、ヤシューヴァルプン(Yasoverman)王を破つて、北インド第一の強国となった。(34)その上、東の脅威であった吐蕃を封ずるために、唐と同盟を結んで経済的援助をするという活発な外交政策を展開した。(35)ラリターディティヤはカールコータ王朝の支配権をカシュミール溪谷内から、インド内部やチベット・中国方面にまで拡張し、王朝の最盛期を現出させたのである。

宗教面では、彼はカシュミールに数々の精舎や仏塔を建立している。それについて、『R・T』は次のように語っている。彼(ラリターディティヤ)は果実(phala)を受けとってはバ

ラプラ (Phalapura) 「とう街」を建設し、木の葉 (paria) を拾ってはバルノートツサ (Parnotsa) 「とう街」を造り、遊戯 (krīda) に興じてはクリーダーラーマ (Kridarama) 精舎を建てた。Ⅳ・一八四

この高潔な王は、フシユカプラ (Huskapura) に壮麗なムクタスヴァーミン (Muktasvamin Ⅱ ヴィシユヌ派寺院) と仏塔のある大精舎を建立した。Ⅳ・一八八

煩惱から解き放されている王は、中庭のある大きな建物と大祠堂と巨大なブツダ「像」をそなえた、永遠に偉大なラージヤ (Raja) 精舎を造った。Ⅳ・二〇〇

彼は何千ポラスタ (prastha 14.9 kg) もの銅を使って、天に届く程のすばらしい、巨大なブツダ「像」を造った。Ⅳ・二〇三

彼は中庭のある建物と祠堂とを建てたが、それぞれが、五つの建物の建築費に相当する費用を要した。Ⅳ・二〇四

すばらしく、かつ高名なカツヤ精舎もまた、その王によって建立され、後にブツダにも匹敵する比丘サルヴァジュニヤミトラ (Sarvajamitra) がそこに任んだ。Ⅳ・二二〇

上記一八四、二〇〇、二〇三、二〇四頃の精舎は、いずれもシェリナガルの北西湿地帯にある都市、パハリハサプラ (Parishapura) に建てられたらしい。⁽³⁶⁾ また一八八頃で述べられたフシユカプラは、名前からもわかるようにクシャーンナ王朝のフシユカ王建設の都市である。⁽³⁷⁾ 七五七年にカシュミールを訪れた悟空は、ラリターディ

ティヤの建立した寺を「蒙鞞寺」、つまり「ムクタービード寺」と記録に残している。⁽³⁸⁾ カールコータ王家が元来ナーガ信仰を持っていたことはすでに記したが、以上の記事から、ラリターディティヤは仏教を容認していたようだ。ところが、『R・T』一九五、一九六、二〇二頃の詩句によると、ラリターディティヤはヴィシユヌ神像を金や銀を用いて造っているので、彼が敬虔なヒンドゥー教信者であったこともわかる。いずれにせよ、国王によって仏教精舎が建立されたという事実は、当時カシュミールにおいて、仏教がヒンドゥー教と並ぶ勢力であったことを示している。仏教のターラー (Tara Ⅱ 多羅) 女神の讃歌「スラグダラーストートラ (Sragharastotra)」の著者であるサルヴァジュニヤミトラが、⁽³⁹⁾ 「ブツダにも匹敵する」と称えられた二二〇頃の記事からも、当時、仏教信仰が盛んであったことが窺える。

ところで、仏教精舎建設はラリターディティヤだけではなく、彼の大臣チャンクナ (Cankana) とその義理の息子によってもなされた。それについて、『R・T』には次のように記されている。チャンクナ精舎を造ったトルコ族のチャンクナは、⁽⁴⁰⁾ 王の心のようによく聳える仏塔と何体もの金のブツダ「像」を造った。Ⅳ・二二一

彼 (ラリターディティヤ) の首席大臣チャンクナは、別の王都 (Ⅱ シュリナガル) にも、祠堂をそなえた、見事な出来栄えの、聳え立つ高さの精舎を建立した。Ⅳ・二二五
大臣チャンクナの義理の息子であるイーシャーナチャンドラ

(Isānacandra) という医者は、タクシヤカ (Taksaka) 二ナ

ガ神族の二王) の恩恵から財を得て、精舎を建てた。 IV・

二一六

このほかに、仏教を信仰していたチャンクナにまつわる次のような逸話もある。⁽⁴⁾

かつて王とその軍隊がパンジャブ (Panjab) に行った時、河の流れによって、行く手を阻まれたことがあった。王が大臣チャンクナに河を渡る手段を尋ねると、彼は河の中に宝珠 (manu) を投げこんだ。すると、魔力で河の水は二つに分かれ、王とその一行は河を渡ることができた。チャンクナがもう一つの宝珠の力によって、河の中から例の宝珠を取り出すと、河の水はもと通りになった。王はチャンクナの所業に驚嘆し、自分の所有物の中で彼の氣にいったものを与えるかわりに、この二つの宝珠を自分に授けるように言った。チャンクナは、「二つの宝珠を差し上げますから、私の願いをかなえてください。」と王に言い、次のように言葉を続けた。

「マガダから象の肩に載せて運んできた仏像をこの私に下賜して、榮譽を与えてください。 IV・二五九

河を渡る手段である宝珠を陛下に差し上げます。輪廻の河 (Samsara) を渡る手段である仏像を私に与えてください」

IV・二六〇

このように射た望みによって、王は仏像を与えた。いったい誰が雄弁な者の言葉に抗する力を持っているであろうか。

IV・二六一

その後、彼は自分の精舎に世尊の像を置いた。それは、あたかも「僧侶の」赤茶色の衣服のように、「今も」美しく輝いている。 IV・二六一

ここにあげた詩句からも明らかのように、ラリターディティヤの治世は、大臣らによっても仏教精舎が建立され、仏教はまだ信仰されていた。また、同時にヒンドゥー教などの寺院や神像も造られている。この王の時代には、国力の充実によって、こうした盛んな寺院建立が可能となったのであろう。一方、寺院建立によって民衆も各々の宗教信仰を一層深めていったと考えられる。

さて、カシュミールの黄金時代を現出させたラリターディティヤの死後、カールコータ王朝は凋落の一途をたどる。拡張してきた国家も、再びカシュミール地方一帯に限定されることになった。『R. T.』の中の仏教に関する記事としては、十一代国王ジャヤーピーダー・ヴィナヤディティヤ (Jayapīḍa-Vinayaditya; 七七四〜八〇五年頃在位) の治世に仏教精舎が建設されたという詩句が一頌みられるだけである。その後、王朝最後の十七代国王ウトパラーピーダー (Utpalīḍa; 八五三〜八五五年頃在位) に至るまで、仏教寺院はもちろんのこと、ヒンドゥー教の寺院もほとんど建立されていない。ラリターディティヤ時代に繁栄していた宗教は、王朝の衰亡と共に生彩を失なっていたと思われる。

注

(一) テキストは M. A. Stein ed., *Kaṭhavaṅśī Rājatarāṅgī*

- or *chronicle of the kings of Kashmir*, Delhi, 1st ed., 1892, 2nd rep. 1960. を使用した。ナンモトリマートを羅語の「鑑」次の三書を参考とした。M. A. Stein tr., *Kalhana's Rajatarangini, A chronicle of the kings of Kashmir*, 2 vols., Delhi, 1st ed. 1900, rep. 1979.; R. S. Pandit's tr., *Kalhana's Rajatarangini, the sage of the Kings of Kashmir*, New Delhi, 1st pub. 1935, rep. 1977.; Vishva Bandhu tr., *Rajatarangini of Kalhana*, 2 vols. (Woolner Indological Series, 5), Hoshiapur.
- (2) 拙稿「古代カシミアール仏教の盛衰」『東洋大学東洋史研究報告Ⅲ』一九八四、七二〜五八頁。
- (3) E. Hultzsch, "Critical notes on Kalhana's Seventh taranga", *Indian Antiquary*, 40, 1911, p. 97.
- (4) 『後漢書』卷八八、西域伝七八。
- (5) 順帝永建二年(一一二七年)、「勇(班勇)復擊降焉耆。於是龜茲、疏勒、于窰、莎車等十七国皆米服從、而烏孫、葱嶺已西遂絕。」
- (6) 拙稿六四頁。
- (7) M. A. Stein tr., *op. cit.*, vol. I, Introduction, p. 77.
- (8) その第一点として「シヒラクラがあげられる。シヒラクラは五世紀末〜六世紀前半のフン族の王であるから、ゴーナナンディヤ王家とは何のかわりもない。なお、シヒラクラは後ゴーナナンディヤ王朝のラナーディティヤの時代にあたる。
- (9) H. Goetz, "Kashmir in the Gupta Period — A Reconstruction of the later Gonandhya Dynasty of Kashmir —", *Studies in the History and Art of Kashmir and*

the Indian Himalaya, Wiesbaden, 1969, pp. 88—90.

- (10) R. T., v. III. 2.
- (11) R. T., v. I. 197.
- (12) 志磐著、大正新修大藏經四九卷三五、三三二a〜b頁。
- (13) 道原著、大正藏五一、卷一七、二二四〇〜二二五a頁。
- (14) 契嵩編、大正藏五一、卷四、七三四〇〜七三五〇頁。
- (15) 覺岸編、大正藏四九、卷一、七二二a〜c頁。
- (16) 『伝法正宗記』と『釋氏稽古略』とは「仏寺を破壊した王を彌羅伽、つまりシヒラクラと記している。しかし、シヒラクラは五世紀末〜六世紀前半の王なので、これは誤りであらう。
- (17) Loh はラダックの首都のことで、南チベット方面をもち、この説もあるが、これには疑問がもたれている。(M. A. Stein tr., *op. cit.*, vol. I, p. 73, III. 10 note.)
- (18) *Ibid.*
- (19) R. T., v. III. 464.
- (20) 『遊方記抄(悟空入竺記)』唐 圓照撰、大正藏五一、九八〇a頁。
- (21) なお、ヴィクラマーディティヤ王の治世にも精舎が建てられたという詩句はあるが(Ⅲ・四七六)、H. ゲーツによると、この王は後ゴーナナンディヤ王朝の王ではないので、ここでは扱わなかった。
- (22) 『大唐大慈恩寺三藏法師伝』唐 慧立本彦棕撰、卷二、大正藏五〇、二三一a頁。
- (23) M. A. Stein tr., *op. cit.*, vol. I, p. 106, III. 380 note.; 『悟空入竺記』九八〇a頁。

- (23) 『大唐西域記』卷四、磔迦國、二一三頁；『蓮華面經』隋 那連提耶舍訳、大正藏二二、卷一、一〇七五〇頁。
- (24) R. T., vv. I. 303—324.
- (25) R. T., vv. I. 306—307.
- (26) A. Biswas, *The Political history of the Hindus in India*, New Delhi, 1973, p. 109; J. F. Fleet, *Corpus Inscriptionum Indicarum*, vol. III, pp. 142—148, 161—164.
- (27) 山田明爾「ヒラタラの破仏とその周辺」(下)、『*仏教史学*』一一二、一九六三、四六頁。
- (28) 山田龍城「蓮華面經について」、『山口博士還曆記念印度学仏教学論集』一九五五、一二二頁。
- (29) 関根秋雄「カシミアール・ラリターティヤ王の在位年代について」(『中央大学大学院 研究年報』三、一九七四、二四二—二四四頁)によると、ワッラルラムヴァルダナは六二五—六六二年頃統治してゐた。
- (30) 関根秋雄「摩訶波多磨龍池考——カシミアール・ナーガ信仰の研究によつて——」、『鈴木俊先先生古稀記念 東洋史論叢』山川出版社、一九七五、二三六頁。
- (31) R. T., vv. III. 484—490.
- (32) R. T., vv. IV. 3—4.
- (33) 関根秋雄「カシミアール・ラリターティヤ王の在位年代について」参照。
- (34) K. S. Saxena, *Political History of Kashmir*, Lucknow, 1974, pp. 56—63; H. Goetz, "The conquest of northern and western India by Lalitaditya-Muktāpīda of Kashmir," *Studies in the History and Art of Kashmir and the Indian*

- Himalaya*, Wiesbaden, 1969, pp. 8—22.
- (35) 関根秋雄「カシミアールと唐——吐蕃抗争——とくに小勃律國をめぐる——」、『中央大学文学部史学科』二三(八八)、一九七八、九九—一八頁。佐藤長「古代チベット史研究」『同朋舎』一九七七、四四〇—四八四頁。
- (36) M. A. Stein tr., *op. cit.*, vol. I, p. 142, IV. 194—204 note, vol. II, pp. 300—303.
- (37) R. T., v. I. 168 及び拙稿参照。
- (38) 『悟空入竺記』p. 980 a.
- (39) サルマンシニキヤッタラはカシミアール王の息子と云われ、J. S. (A. Schiefner tr., *Tarantata's Geschichte des Buddhismus in Indien*, St. Petersburg, 1869, 鈴木学術財団、1965, p. 168)。彼の年代については様々な説があるが、ヤンテールリニンは八世紀前半に比定してゐる (M. Winternitz, *History of Indian Literature*, New Delhi, 1977, vol. II, p. 378)。
- (40) M. A. Stein tr., R. T., v. IV. 211 及び拙稿『*Tukhara*』の語は「トルコ」などの言葉をサンスクリットに翻訳した言葉であると考へてゐる。なお、チャンタナ精舎は、悟空の訪れた「跋耆王」の国であると云ふ (M. A. Stein tr., *op. cit.*, vol. I, p. 143, IV. 211 note; 『悟空入竺記』九八〇(画))。
- (41) R. T., vv. IV. 248—258.
- (42) R. T., v. IV. 507.